



久保田 信

48

ツノクラゲ



たぐさんの角を出したツノクラゲ

ツノクラゲは大型のクシクラゲ類である。左端の目盛りを見ると、この個体は約95ミもある。楕円(だえん)体のすらりとしたスマートな体つきだ。

体の上側の真ん中の落ち込んだ箇所に1個の感覚器があ

り、これで8列の櫛板(くしいた)の運動の制御をしている。櫛板はセロハンのように、光を受けてあちらこちらが光っている。8列の櫛板をシンクロナイズになびかせながら、実にゆっくりと海中を移動する。

変わった特徴は、非常に体が脆弱(ぜいじゃく)なことだ。ツノクラゲのそばでちょっとした水流を起こすものなら、たちまち体は無残に引きちぎれていく。このため完全な体の個体採取するのは大変困難だ。写真の個体は海中でそっと容器の中に入れ、無傷で捕まえることができ

た。

ツノクラゲの体の下側には口が開く。口の周りによく開く一対の振り袖のような構造が発達している。この個体ではそれが閉じているが、この袖状突起で餌を囲って逃げないよう包みこむ。

ツノクラゲのもうひとつの変わった特徴は、名前の通り、刺激すると角をよきよきと伸ばす点にある。体全体に角が出るので、いばいばのクシクラゲに変身する。この個体は、撮影時に柄付針でつついて角を伸ばさせた。シンクロナイズして角を突き出す行動は多分、外敵への防御と思われる。

ツノクラゲはクシクラゲ類の全種がそつであるように、雌雄同体である。自家受精はしないが、有性生殖により小さな若いツノクラゲが誕生する。幼体時に角はなく、成長につれてできてくる。袖状突起も、ある程度大型の体にならないとできてこない。

(京都大学准教授)